不条理な現実

山口県国際交流協会創立二十周年事業として十七日に山口市で〝山口から世界まるかじり！〟というイベントが開かれた。

娘のリカは一九九五年から七年間、パレスチナに住み、母子保健プロジェクトにかかわった。帰国後も東京を拠点にパレスチナ支援事業に取り組んでいる。

そこで私たち夫婦を中心にNGOワード・パレスチナを立ち上げ、細々とではあるが支援活動を続けている。今回のイベントにも自治区ガザの写真展や現地の婦人の刺しゅう製品の展示販売などをした。

この種のイベントとしては久々に活気があったのは、大勢の大学生や若者がボランティアで参加していたからだろう。タイやベトナムへのスタディー・ツアーに同行した大学生もほぼ全員がボランティアとして参加していた。ここが一般観光ツアーとの違いである。

さて、そのイベントの展示コーナーでタイ北部のモン族を支援しているシャンティ山口の〝電気も、水道も、トイレもない〟ラオスのモン族の写真に目を奪われた。

実は昨年九月に行ったベトナムのスタディー・ツアーにシャンティ山口の佐伯事務局長も参加された。我々がベトナムを出発したあと佐伯さんとスタッフのモン族のジッポンさんは別行動でラオスに行ったのだ。

もともとジッポンさんはラオスに住んでいたが、ラオスが共産化した時、タイに脱出した。今回、ラオスを訪れ、生まれ故郷のモンの人たちがあまりに貧しい生活をしているのを見て涙したことが、シャンティ山口のニュースレターに出ていた。

さらに心を痛めたのはタイのモン族四千人が昨年末、ラオスに強制送還されたというニュースだった。

タイ北部のペッチャブン難民センターにはラオスを脱出してきた四千人のモンがいた。タイ、ラオス両政府は彼らを〝経済難民〟としてラオスに送還するとしていた。国連やアメリカはもし強制送還されると迫害されるので中止するよう要請していたが、昨年末、とうとう強制送還されたのだ。

ラオスにいるモン族のあまりに貧しい生活にジッポンさんは涙した。そこから脱出したモンの人たちがラオスに送還されれば「大量餓死の恐れがある」とニュースレターは伝えている。

自分の国を持てない流浪の民で、中国揚子江付近に住んでいたモン族は漢民族に追われ、中国西部の貴州省、雲南省、四川省などに少数民族として住んでいる。一部のモン族はさらに西に移動し、ラオス、ベトナムなど東南アジアの国々の少数民族として生活している。

ラオス内戦の際、モン族の多くはアメリカが支援する側についた。しかし、ラオスが共産化されると身の安全のためタイに脱出した。

そして強制送還。何と過酷な宿命を背負って生きなければならないのだろうか。

展示されているラオスのモン族の写真を見ながら、あまりに不条理な現実に胸が痛かった。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

子守りをするラオスのモンの子どもたち

水くみも子どもたちの仕事だ
＝いずれも佐伯事務局長提供